ふるさと探訪

ふるさと探訪

はじめに
1. 母親に連れられて歩いた道
2. 実家と周辺の様子
3. 幼稚園、小学校時代
4. 第二のふるさとへ
5. 祖母と両親からの教え
6. 兄弟が見たふるさと
あとがき

はじめに

退職してからは、好きな山歩きやスキーを思う存分に楽しみ、７６歳になった。充分に楽しんで一息ついた辺りから、子供の頃に辛苦を経験したふるさとの事が気になりだした。

特に、４、５歳の頃、真夜中に母親は妹を背負い、Adaの手を引いて歩いた真っ暗な道や、地獄越えと云われた山道。イナゴや小魚を釣った川や　真っ黒になって泳いだ淵ヶ井等々だ。

母親の実家は、川並に居を構えていた事もあって、大阪から空襲を避けて疎開してき来たのだ。Adaが４歳の頃の話になる。

母親の実家は近江の豪商の娘で、祖母が健在であり往事の面影がまだ色濃く残っていた。

当時、大阪府庁に勤務していた父親が、終戦と同時に占領軍によって公職を追放され、母親の実家に引っ越してきた。

同じ頃、母親の妹の家族も公職追放のあおりを受けて、ここに移り住んできた。豪商の家だけあって、敷地は広く、2家族とも別棟に済むことが出来た。

その頃、Adaは安土と川並の間を母親の手に引かれて行き来していた。

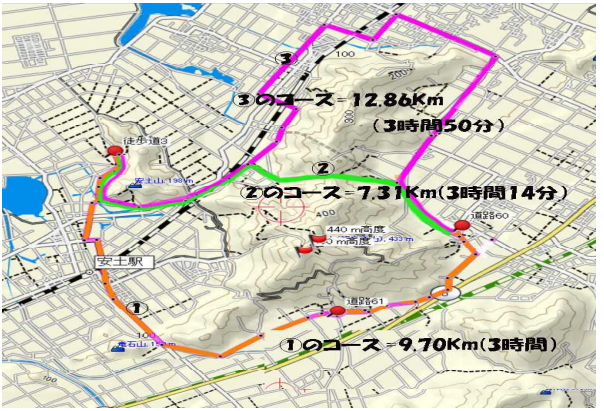
Adaは川並で幼稚園に入り、小学校に入学したが、10歳の10月に札幌に移り住むまでの間、川並と安土での生活をした。

ここでふるさと探訪を思い立ったのは、母親の苦労と行跡を知り、体感して感謝の念を再確認するためであった。

1．母親に連れられて歩いた道

母親に手を引かれて歩いたコースは、三つあったが、今回、そのコースを一つずつ歩いた。

①のコース：安土宅～石山～川並=9.7km（3時間）



②のコース：安土宅～地獄越え川並=7.31km(3時間14分)

③のコース：安土宅～能登川～川並=12.86km(3時間50分)

コースについては、添付の地図を見てください。

三年間の天気を調べ、ヘビやスズメバチの襲撃を受けることなく歩ける日を決めた。訪れてみると至るところで墓参りをしている人に出くわした。お彼岸にぶつかったのも何かの縁かもしない。

三コースの中で、当時、一番多く歩いたのは、①のコース、つづいて、③のコース、②のコース順だ。

上記の三コースを歩いて感じた事は、頻繁に山歩きをして体力に自信があるとは言

え、二度と歩きたくない程、遠い距離だった。

目的地が1カ所なのに、なぜ違ったコースを辿ったのか。なぜ、最短距離のコースを使用しなかったのか。

①のコースから順を追って見ていくことにしよう。

（1）安土宅～石山～川並コース=9.7km（3時間）

写真は、自宅から安土城の方角を見たところだ。

自宅は、写真手前左側の辺りにあったが、今は昔の面影は残っていない。

岬の辺りに水車小屋があって、雨上がりの暑い

夜になると火の玉が良く出たので、恐ろしかった。

岬を曲がると、安土城へ登る石段があるが、ここまでの距離は長かった。

夏の暑い日には、道路脇に流れている側溝の水を頭からかけて歩いた。

夜中にこの前を通って川並の家へと歩いたが、この辺りは見えず、ひたすら歩いていた所で記憶はない。

安土城へは石段が上へと続いている。

安土城の石段を過ぎて程なくして墓場の横の道を通る。

昔は、土葬が主であったため、雨の日、夜中にこの道を通ると、青いリンが墓場からボーと見えてくる。

そのたびに、最近、誰かが死んだのだなあと言いながら、念仏を唱えながらあるいた。

怖くて通りたくない嫌な場所だった。

今でもこの横を通るのは、昔の事が思い出されて嫌だった。

昼間歩けば、恐ろしい目に遭わないでいいだろうと思うが、夜中に歩かざるを得なかった理由があった。

それは母親の畑仕事が終わってから川並の家に向かうので、どうしても夜になってしまったのだ。

墓場を過ぎると、道は緩やかな坂道になっていたが、結構長く続いていて一休みしてしまった。坂を登り切ると川並への直線道路に出た。

周りの景色は覚えていなかったが、母親は暗闇の中、まっすぐな道を妹を背負いAdaの手を引いて何を考えて歩いたのだろうか。

検証とは言え、この辺に来て、少し、バテ気味になってしまった。

また、想像すらしなかったことだが、冷たい風がずーと吹いてきて、非常に寒かった。

実家のある川並までは、後少しだが、恐ろしい墓場を通り、山間を抜けなければならなかった。

多分、ここがサンマイ（焼き場）のあった所だろう。

当時は墓場へ石段がずーと続いていて、月明かりに人が上から下りて来たことがあった。この時の光景をAdaは、しっかり覚えている。

怖くて、母親はAdaの手をしっかり握りしめ、口のなかで念仏を唱えながら、静かに足早に通り過ぎた場所と思われる。

当時は、周りに家などなく、長い石段だけが続いていて不気味な所であったことを覚えている。

父親の母親（あやめばあさん）が、この焼き場でお骨になった場所でもある。

おばあさんの葬式の様子は、後に4男の記述に出てくるので読んでいただきたい。

あやめばあさんは、札幌に住んでいたが、父親が面倒を見ることになったものとおもわれる。

当時、川並の実家からさほど遠くない石川に住んでいたが、なぜ石川に移り住んだのかはわからないが、川並の住まいが手狭になったのかもしれない。

あやめばあさんは、「れっこちゃん、れっこちゃん」といって、妹をよくかわいがっていたが、わんぱく盛りのAdaは敬遠されていた事もあって、記憶はほとんどない。

さんまい（焼き場）の難所を通り山間を抜けると、まもなく川並の家がある集落へ到着する。

川並に入ると道幅は狭く、くねくねと曲がっていて、両側に家並みが連なっている。

写真の右側の家が見える辺りに奥井新左衛門さんの家があったが、今はわからない。

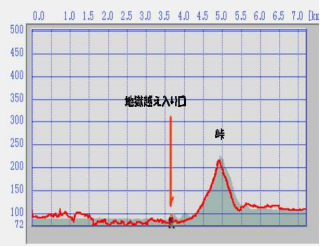
突き当たりを左に曲がると、母親の実家がある。

ここまでが、①のコースであり、全行程9.7Km　3時間であった。

昼間歩いたが、嫌になるくらい遠い距離であった。
母親は、このコースをどのくらいの頻度で川並の実家まで歩いたのか記憶にないが、山歩きになれているAdaとは言え、二度と歩きたくはないと思った。

（2）安土宅～地獄越え川並=7.31km(3時間14分)

安土の家から川並の家へ行く最短距離は、地獄越えのコースだが、このコースは昼間しか使えない事もあって、使用頻度は一番少なかった。
現在、ここが地獄越えのコース入り口となっていて、周りには公共施設の建物がたっていて、公園の様相を呈していた。



笹藪をかき分けて歩く事と、ヘビやスズメバチの襲撃を受ける危険があったので、この季節を選んだが、今は、「安らぎの郷」と名付けられた立派なハイキングコースが出来ていた。標高約250mを難なく登ることが出来たが、風は強くて寒かった。

このルートは、父親と歩いていたのではないかと思う。なぜなら、途中で蜂の巣を見つけて蜂の子を食べると栄養があって美味しいと教えられ食べた。この様な知識は、母親にはないからだ。

当然、ハチに追いかけられて山の下へ向けて逃げた記憶が残っている。

地獄越えは、昼間に移動することがなかった母親は、余り使うことはなかったのではないかとおもう。また、地獄越えは、Adaが小学生位の年齢になっていたのではないかと思う。

今回、途中で、一度、ハチの羽音を聞いて身構えてしまった。

地獄越えをして下りた場所には、山をくりぬいて大きな道路が走っており、いまは山越えをしなくても楽に往来が出来る様になっていた。また、地獄谷越えを終えた所から川並方面に向けて、立派なサイクリングロードがつくられていた。

（3）安土宅～能登川～川並=12.86km(3時間50分)

このコースは、地獄越えコースより多く歩いたが、一番距離が長く、途中、追い剥ぎが出る場所が2カ所あった。

安土の家から線路沿いに能登川駅に向かって歩くと愛知川に到達する。愛知川沿いの道は、追い剥ぎが出るとのことだった

今は、両岸がコンクリートで覆われているが、当時は愛知川沿いに小道があって、その横を勢いよく水が流れていた。

母親の話によると、この辺りでAdaは眠たくて少し寝かせて欲しいと母親に頼んだそうだ。母親は、声を潜めて、ここは追いはぎが出るので早く行こうとAdaを促したと言う話を後に母親から聞いた。

真っ暗な中、川の水が勢いよく流れいて恐ろしかったことは覚えている。

追いはぎが出る他の一カ所は、川並まで後少し

のところにある一本松？の辺りだ。
母親は、追いはぎが出るとの話をして静かに歩くことを促したそうだ。　幼稚園に入る前の4、5歳の頃だと思う。

母親に連れられて、Adaは安土から川並まで3つのコースを歩いたが、真夜中に歩くので、母親が「怖い思いをした」などの状況によって、より安全と思ったコースをその都度、選んだのではないかと思う。

ふるさと探訪が終わった現在、気になっていた事をやり終えて、ホッとしていると同時に、田んぼの仕事が終えてから、母親はよくもこの距離を妹を背負い、Adaの手を引いて歩いたと思う。

母親の肉体的、精神的強さを身をもって知った「ふるさと探訪」となった。
感謝の一言に尽きる。

2. 実家と周辺の様子

立派な玄関であったが、Ada達はこの玄関から入ることは許されず、奥手の木戸から出入りをしていた。

当時、祖父（源三郎）はすでに亡くなっていたが屋敷は、往事のまま残っていて広く、「はな」ばあさん（Adaの祖母）と叔母（母親の妹）が住んでいた。

叔母（ともおばさん）が亡くなった後、実家は人手に渡って、八年庵と命名されて一般公開している。なお、八年庵は、祖父源三郎が八年と名乗っていた事から命名されたものと思われる。

実家の裏庭は、苔むす静かなたたずまいの庭であったが、現在、その庭は観光者用の駐車所になっていた。

庭には柿の木があって、木に登ってはいけないと注意されたが実がなると、こっそり登った。柿の木は、折れやすいとのことだったが、幸いなことに折れて落ちることはなかった。

●玄関を入ってすぐにある客間と仏間。

「はな」ばあさんと一緒に仏さんにお参りして、いつの間にか「キニョウムリョウジュニョライ」のお経を覚えてしまった。今でも、お経を上げることが出来るから不思議だ。

お参りの後は、ご先祖様を大切にする事、人と

して良い行いや悪い行いは巡り巡って自分に戻ってくる事、親孝行や物を粗末にしないこと等など聞かせられた。

信心深いと云うのではなく、お参りが終わると、お利口さんだねといって言って、お菓子や「おぶくぜん」がもらえたのが楽しみであった。

少しは、信心深かったのかな？

ともあれ、「はな」ばあさんの教えは、その後のAdaの生き方の根幹に根付いて現在に至っている。

駐車場になっている場所は、当時は苔むす静かな庭で、柿の木があって、遊び場所としては最高であったが、立ち入りが禁止されていた。

庭を抜けると裏木戸（手前側）があって、苔の匂いがする落ち着いた雰囲気の場所で、Adaは好きだった。裏木戸からは大きな道路に出ることができた。

向かって左側手前は、センダイと呼んでいた客用座敷で、子供の我々は入ることが出来なかったが時々、忍び込んでいた。

中央の建物のところは、我々が住んでいた家。現在は、改装されて受付となっていた。

右側の塀の奥は、別棟の家があって、そこへ行くところにイチジクの木があった。イチジクは食べ放題だったが、3個ほど食べると口の端が裂けて痛くなってしまう。沢山は食べる事が出来ない実だったが、美味しかった。

●センダイ（客間と庭）

庭は、現代的に造園されており、近江商人の精神（質素、倹約の中にもワビサビを見いだす）が、

失われてしまったことは、残念なことである。
これも時代の流れと云う事か・・・

しかし、取り壊されて空き地になるより良かった。

現在、この場所も自由に見ることが出来るようになっていたが、「三つ子の魂・・・」が蘇ってきてゆっくり見る事が出来ず、早々にこの場を後にした。

●お不動さんが祀ってあった台所

お釜で煮炊きをしていた。
ここには、食べるものがあったので、良く出入りしていたが、何かを食べる事が出来たわけではない。

手前の左側が、五右衛門風呂場があったところで、わらを燃やして火吹き竹を吹きながら湯を沸かしが、煙が目に入って大変だった事を覚えている。

右側の部屋には、上に通じる箱階段がある。二階は女中さんや書生さんが住んでいたと思う。

女中さんは、中村さんとか云っていたかな？

懐かしい昔ながらのたたずまいは変わっていなかったが、台所独特の匂いはなくなっていた。

●石川の家

母親の実家からさほど遠くないところに石川というところがあって、そこの神社の前の家に住んでいたことがあった。

すぐ近くには、こんもりと杉に覆われた神社があった。

冬は神社に行き、凍りついている杉の葉を拾い集めて来て家で暖を取った。
夏は、この神社の杉の森に隠れて、グラマンが小学校に設置してある模型飛行機を

射撃したのを見ていた。

赤い火がグラマンからパッパッと出て攻撃する様子は非常に怖かった事を覚えている。

また、グラマンが八日市飛行場を何度も何度も爆撃を繰り返す様子を見ては悔しい思いをした。

母親からは、グラマンに追いかけられたら、逃げずに道の横の溝に伏せるよう注意を受けたのもこの頃であった。　幼稚園に行く前の年の頃であった。

食料は、付近を探し回って食べられる野草を採ってきては家で調理を手伝った。「あかざ」と云う草は、美味しいので、探すのに苦労した。

ある時、一握りの米を増やして食べようと、桜餅に使う桜の葉っぱを採ってきて料理した。おかゆができあがったので食べ始めたところ苦くて食べられなかった。なけなしの米は無駄になってしまったが、不思議と誰からも怒られなかった。

食べる野草がなくて、「てっしん草」（「鉄道草」正式名はヒメムカシヨモギというキク科の植物）も採って来て料理したが、これも食べることができなかった。

Ada（5歳頃）の料理人としての失敗談だ。

この頃、食べるものがなく、糠を丸めて新聞紙に包んで火の中に入れて焼いて食べたが、不味くて食べるのに苦労した。

時々、ふすまを食べることが出たときは、ご馳走だと喜んだ。

3．幼稚園、小学校時代

1）幼稚園時代

幼稚園の時の思いでは、初めてスキーをしたことだ。

雪が降った時、父親が持っていたヒッコリーのスキーを担いで山へ行き、兄弟で滑った。

滑ったと言うよりは、スキー板を尻に敷いて坂道を滑り降りたのだが、楽しかった。散々楽しんで、家に帰ってきたのはいいが、ズボンはドボドボ。替えのズボンがないので、その日は幼稚園に行くことが出来なかった。

今考えてみると、スキーを始めて乗ったのが幼稚園の時となる。

2）小学校時代

（1）川並の小学校時代

小学校に入ったときは、「さくらがさいた、さくらがさいた」と言う教科書だった。漢字は、次の年にはすっかり変わってしまい、せっかく覚えたのにと不満だった事を覚えている。

川並の小学校には4年生の10月まで在校していたが、この間、安土の小学校に通っ

たときもあった。

Adaが小学校に通い始めると、いわゆる”いじめ”が毎日のようにあった。なけなしの芋を3個ふかした弁当を学校の横を流れている川の中に投げ込まれたり、集団による暴力、捕ったドジョウを食べる事への中傷等々、日常茶飯事であった。

家に帰っていじめられたことを母親に言うと、「お前は、豪商源三郎の孫だ」し、「父親は日本一の大学を卒業しているのだ」。そんじょ、そこいらの子供達とは、まったく違うのだ。胸を張っていなさい。　といつも云われた。

この母親の教えのお陰で卑屈にならなかったし、4、5人を相手に喧嘩をしても勝ち、いつも、大手を振って歩いていた様に思う。

ある時、学校からの帰り道で、クラスの子供の父親が鎌を持って立っていて、「うちの子供をいじめたら承知せんぞ！」と言って立ちはだかった。

いじめられているのは、Adaの方なのにとは思ったが、おとなしくしていた。
いま考えても、おかしな話だと思っている。

学校から帰ると、勉強どころではない。毎日のように釣り竿を持って魚を釣りに歩いた。
仲のよい相手は一人いたが、遊ぶより餌探しの方が大切だったのだと思う。

●釣り場

行けば必ず、釣れる秘密の場所があった。
当時、この川の両岸は、草が生えていてムツ、ハヤ、などが釣れた。
特に、橋の下へ糸を垂らすと、必ず、一匹釣れた。
だが、2匹目は絶対、針にかからなかった。不思議な場所だった。

ムツは、なかなか釣れなかった、よそのおじさんが来て、「坊！ちょっと貸してみな」と言うので、釣り竿を貸すと、嘘のようにつぎつぎに釣り上げた。　大人はすごいとびっくりした思い出がある。

鮎は、たくさん泳いでいたが、一匹も釣ることができなかった。

この川の上流には神社があって、そこから水が湧き出して流れていた。

こんこんと湧き出る泉には、トンギョ（イトヨ）がいて、これも釣りの対象であったが、釣るのに苦労した。

川いっぱいにアマモが生えていたいい川であったが、今では、神社から湧き出ていた泉はなく、魚の姿さえ見当たらなかった。

今でも清流になびくアマモを見ると、不思議と安らぎを覚えるのは、この頃の釣り三昧が楽しかったからではないかと思う。

残念ながら、アマモも、魚もいまは見ることが出来なかった。

●正面玄関の前を流れる小川。

この川の思い出は沢山ある。

まず、左側に格子が見えるが、この奥で隣の人が野菜を洗ったり、鍋を洗ったりしていた。

Adaは格子の中に逃げ込む魚を、一生懸命、釣って遊んだ。

川は淵ヶ井と云う湧き水の場所につながっていて、そこから清水が絶え間なく流れてくるので、鮎やギギ（ナマズに似ている）等々の魚が住んでいた。ギギは、背中にとげがあって素手で掴むとけがをするやっかいな魚だった。

兄弟そろって、川をせき止めて、水をかい出して魚を捕ったところでもある。

鮎が川に登ってくる頃になると、Adaは川の曲がり角に、うつぶせになって、鮎が来るのを待ち構えて、ザルで捕まえた事もあった。

鮎は素早いので、なかなか取ることが出来なかったが、ねばって1匹捕まえた。

「酢醤油で丸呑みして食べるとうまい」と聞いていたので食べたが美味しくはなかった。

川幅は、1m強あって、子供の時は、飛び越せない場所もあった。

40歳頃に訪れたときは、何て、狭い川だろうとおも思ったが、76歳になった今、飛び越すには無理があるように思えた。

年の流れとは、面白いものだと思った。

● 淵ヶ井とため池

清水が湧き出るこの場所は、実家の前を流れる川の源流になっている。

ここには、大小２つの淵ヶ井と少し離れたところにため池があった。

現在は、淵はなくなっていたが、それらしき痕跡はあった。ため池は跡形もなく、その上には住宅が立ち並んでいた。

夏になると、子供たちがこの淵に集まってきて泳いだ。

Adaの泳ぎは、もっぱら、犬かき専門だったが、石を淵の中に投げ入れて潜って取って来て遊んだ。

小さい方の淵に投げ入れた石は潜って取ってくることが出来たが、大きい方の淵は、底まで潜る事が出来たのは稀であった。

ここは、二度おぼれかけて、死ぬ思いをした場所でもある。一度は、淵ヶ井から流れ出る川で、二度目は、淵ヶ井の横のため池。

泳いでいたが、力尽きて沈み始めてもうダメと思ったとき足が底について助かった。

いずれも、1人で泳ぎに行って、「去年泳げたから今年も泳げる」と思って泳いだのが失敗の元だった。二度とも、その夏は、泳ぐのを止めた。

淵ヶ井には、時々、青年（今の高校生ぐらいかな？）が泳ぎに来て、小さい子供達を遊びの道具にして、大きい方の淵ヶ井に引っ張り込んだりするのだ。

遊び道具にされる方は、生き死に関わるほどの恐怖で震え上がっていた。

あるとき、遊びの対象がAdaに向けられた。

Adaは、泣きながらひたすら逃げた。土手を駆け上がり、兎に角、逃げて、逃げて、逃げた。ついに、相手は諦めて引き返して行った。

今は昔、逃げた土手はなく、淵ヶ井は淵らしきものが一つ残っているだけだった。

今回、訪れて初めて気がついたが、川並は山の麓にあった事だ。

1人で山に行ったことも、地獄越えをした事もあったが、Adaは視線の届く範囲しか見えておらず、大きな山としての認識はなかった事に気がついた。

子供目線が原因なのか、餌探しに川ばかりを見ていたのかわからないが、不思議な感覚になった。

（2）安土の小学校時代

安土城の入り口。この前を学校へ行き来していた。家から学校までは、2.5Km　41分程の距離だ。

当然、この山には何度か登ったが、今は、登ることが禁止になっている

夏の暑い日の学校帰り、暑くて堪らず正面の石垣を下りて、川の流れに沿って流されながら遊んだ。

川の水は、石垣の辺りまであって、深いがゆっくりした流れだった。

ある時、民家からは川へ降りる石段のところで、おばあさんが野菜を洗っていた。

おばあさんをびっくりさせようと、橋のたもとからこっそり川に入って、その前を頭だけ出して流れていった。

おばあさんは、急に目の前を頭だけ出して流れてくるAdaを見てビックリして、「坊　！　大丈夫か」と声を掛けてくれた。

「大丈夫だよ！」と返事をして、内心ほくそ笑みながら川下のところから石垣をよじ登った。

小学校3年生頃だと思うが、この頃から、かなり、

やんちゃな子供だったようだ。

この川の上流は、大きなお堀につながっていて、この辺りまでよく魚釣りに来ていた。

いつものように釣りに来た時、堀の向こう岸に4，5人の同じ年頃の子供がいたが、騒ぎながら釣りをしていた。

一方、こちらは1人で静かに釣っているから、まもなく大きなナマズが釣れた。

それを見た相手子供達は、悪口雑言を言って石を投げてきたが、まったくこちらに届かなかった。

騒げば騒ぐほど、魚がこちらに来るので心の中で喜んでいた。

程なくして、二匹目のナマズを釣ったのを見た

悪ガキどもは、向かって左側を堀に沿って、こちらに走ってきた。

堀の縁を半分ほど走ってきた辺りで、危険を感じたAdaは竿をしまって、ナマズ2匹を持って、さっさと家に帰ってきた事があった。

いまは、かつての堀の大きさはなくなっているが、今でも魚が釣れそうだった。

この堀の周辺は、朝鮮人が多くすんでいた場所だった。

この場所は、すぐ上の兄（四男）とタイヤがペシャンコのおんぼろ自転車に乗って通りかかった時、運悪く行く手に数人の子供達が両手を広げて通せんぼうをしていた。

止まれば、ひどい目に遭うことはわかっていた。

兄（4男）がAda行くぞ！しっかりつかまって

おれ！と云って、猛スピードでとうせんぼうをしている列に突っ込んで行った。
悪ガキどもは慌てて両側に逃げた。

その間を走り抜けたが、後ろから石が飛んできたが、幸いにして石に当たることなく逃げ切った場所だ。
いまは、きれいな家が整然と並んでいた。
あの当時の悪ガキ達は、まだ生きているか、どんな余生を送っているのかを考えながら両脇に並ぶ家々を眺めながら歩いた。

当時、通学していた安土小学校だが、建物は新しくなっていた。
ここに通学しているときの記憶で、良い記憶は何一つない。
昼飯もなく、腹を減らして、人が食べているとき

は教室の外で遊んでいると云った状態が時々あった。遊んだり、喧嘩をしたりする友達は一人もいなかった。

子供ながらに、食べるものがない一番つらい時期だった。

魚を釣ったり、水に潜ってだぶ貝を探したりして食べたが、食べるものがないときは、カボチャの花が咲いている時にカボチャの小さな実を食べた。

実が大きくなるまで待っている余裕はなかった。　貧乏のどん底だった。

親は安土で干拓して稲や野菜を育てていたが、大変だったと思う。　子供も大変な時代だった。

しかしながら、琵琶湖につながっている川が沢山あったので。魚のモロコはよく釣れた。たまには、ハヤやナマズが釣れたが、ヘラブナや鯉は釣ることが出来なかった。

狩猟民族並の毎日であったが、大物の魚を釣る技術がなかったのは、今考えても悔しく残念だ。

最近、安土在住の者から、鮎を大量に釣っている動画が送られてきたのを見て、今もって鮎釣りをしたいと、心が騒ぐ。

安土小学校時代は、当然、勉強したことがなかった。通信簿は、国語が優、算数は良。成績を見た母親から、「次は算数も頑張りましょうね」と言われた。

母親から言われたことをよく守って、次の通信簿は、算数が優、国語は良だった。要するに、食探しで勉強はする暇はなかったのだ。

4. 第二のふるさとへ

1）列車の旅

小学校4年の10月に父親の故郷に向けて移転をすることになった。

父親は、高校時代の恩師の誘いを受けて、札幌に帰って教員をしていて、すでに、

三男と四男は父親と生活をしていた。
札幌で家族全員が一緒に暮らす基盤が出来たとのことで、残っていた母親とAdaと妹は、川並を離れることになった。

川並を離れるに当たって、母親が魚屋から見たこともない大きな海魚の頭をかって食べさせてくれた。後になってわかったことは、魚はハモの頭だったようだ。

母親が言うには、東海道本線（表側）で行くと1日早く着くが、お金がないので裏日本を通る汽車で行くと言った。

汽車に乗って2日がかりで札幌に到着したが、その列車の中では、朝が来ると、多くの人が乗り込んできたが、夜は一車両貸し切り状態になった。
運動不足を解消するよいチャンスとばかり、椅子から椅子へと遊び回る事が出来て退屈はしなかった。

夜中に窓枠に腰掛けて外を見ていたら、母親から、「ここは、親知らず子不知といって、昔は人が波にさらわれた所だ」と教えられた。見ると、波が線路脇にまで来ている不気味な所を通り過ぎていた。慌てて椅子に戻ったことを今でも覚えている。

気持ち悪いところだった。

朝になると秋田辺りで乗り込んできたおじいさんが、私に話しかけてきたが、何を言っているのかわからない。こちらも一生懸命しゃべるが、相手も私の言葉がわからない。

結局、おじいさんは、怒ってしまった。　今考えると、言葉がわからないのは納得できる。秋田弁と関西弁では、話が通じるはずもない、おかしな経験をした。

船に乗った時の記憶はないが、函館から車窓に映る茫漠とした景色はなんとなく覚えている。

札幌に着いた時、誰が迎えに来てくれていたかの記憶はない。

当時の札幌市の人口は、14万足らずだったと思う。

父の住んでいる家に着いて、度肝を抜かした。

板敷きの部屋に木箱があって、見たこともない大きな魚がごろんと転がっていたのだ。鮭という魚であった。今まで見たことも食べたこともない魚が、無造作に転がっていた。

家は教員住宅の1軒屋で、北海高校の野球グラウンドの横にあり、広い畑と庭があった。

2）豊平小学校時代

小学校は、自宅からさほど遠くない所にあった豊平小学校で、担任は女の先生（天野暢子（チョコさん）であった。

友達は、川並時代と全く違っていて、友好的で、すぐに仲良くなった。

1クラス60人ぐらいで教室の中を自由に歩く事が出来ない程、狭かった。

戦いに明け暮れた川並での気のきつさは消えることがなく、上級生相手に喧嘩をしたことはあったが、同級生と喧嘩をした記憶はない。

あるとき、先生（チョコさん）がクラス全員を怒って、教室を出て行った。
何故怒ったのか、怒られた理由がわからない事に憤慨したAdaは階段を降りていくチョコさんにほうきを上から落とした。
見事に命中したが、チョコさんは黙って行ってしまった。
その後、ちょこさんから怒られることもなく時は過ぎていった。
卒業後、本人に聞くと、誰がほうきを落としたかを知っていた。大した先生だった。

学校から帰ると、餌探しに釣り竿を持って魚釣りをして歩いた時とは、全く違った。
ビー玉をズボンのポケットに入れて、近所の友達とビー玉遊びに明け暮れた。戦績はいい方だった。

家は北海高校のグラウンドに隣接していたので、高校生が硬球で練習している時は打ったボールがどこへ飛んでいったかをしっかり見ていた。
野球部員がボールが飛んでいった辺りをしばらく探すが、探せなくて帰って行った後、Adaはその辺りを探してボールを見つけだすのだ。
夏の終わり頃になると、麻の袋は硬式ボールで一ぱい集になっていたこと事もあった。

集めたボールで野球をして毎日のように遊んだので、肩が強くなっていて、学校ではキャッチャーとして活躍した。
また、集めたボールと伝書鳩を交換して飼ったこともあったが、外に離すと帰ってこなかった。
後でわかったことだが、伝書鳩は、元の家に帰る習性があるから当然、居なくなったのだ。

風呂は母親に連れられて風呂屋に行っていたが、あるとき同級生の女の子と風呂の

中でばったり会って気まずい感じになった。　それ以来、母親と一緒に風呂に行くのはやめた。

日曜日になると、父親と一緒にコッペパンを買って、厚別の川へ歩いて魚釣りに出かけた。

川並の川と違って魚は沢山釣れた。釣れた魚は、フナやウグイだったが、腹を割いてスズメ焼きにして食べた。

日常生活に必要なものは、すべて購入したが、そのスケールの違いにびっくりした。二条市場に買い出しに行くと、箱単位で、ホッケやサンマ等などの魚を買ってきた。

秋になると、近くのりんご園にリンゴを買いに行ったが、大きな箱に一杯買って来て、毎日、たらふく食べることが出来た。

父親は教師をしていたとはいえ、食べ盛りの子供が5人と父母の計7人ともなると、家計は苦しかったようだ。

後で聞いた話だが、母親は、度々、質屋通いをしていたとのことだ。

Adaは、その様な生活から完全に解放されて心ゆくまで遊びほうけていたが、この頃になって生まれて初めて母親から「勉強しなさい」と言われた。
これ以降、度々、「勉強しなさい」という言葉を聞いたが、気にすることなく遊んでいた。

冬になると、スキー遠足があった。
学校の近くにある坊主山？へスキーを履いたまま、歩いて行くのだ。

母親にとっては、初めての冬、ましてや、スキー遠足の実態がつかめていない。
Adaと妹にとっても初めての経験だ。
母親から、寒くないようにと「軍手を二組」づつもらって、長靴をはいて出かけた。
スキー板は、小樽のおばさんの子供が使っていた大人用のアオダマの単板。

遠足は、学校から山まで平野を横切って滑りながら行った。
初めてのスキー。転んでばかりいたので、軍手は、あっという間に雪だらけで、凍

り付いてきた。
冷たくて、手が凍りそうになったが、友達たちは平気な顔をして滑っている。
不思議に思って、「手が冷たくないのか」と聞いたところ、手袋を見せてくれた。
手袋は、毛で覆われていて暖かった。

友達は、「手が冷たいのなら少しの間、はめていたら」と言って、手袋を貸してくれた。　生きた心地がしたことを覚えている。
川並の友達と、全く違って、みんな優しかった。

小学校卒業後、クラス会を時々開催していたが、年齢ともに友達が減っていき行き、ついに中止となった。
子供は、皆同じはずだが、住んでいる環境によって、意地悪くもなり、優しくもなる。

その後、中学、高校、大学へと進学したが、いづれの時代でもいい友達に恵まれ、

Adaにとって札幌は、かけがえのない「ふるさと」となった。

5. 祖母と両親からの教え

●祖母から受けた教え

「はな」ばあさんからは、ご先祖様を大切にする事、人として良い行いや悪い行いは巡り巡って自分に戻ってくる事、親孝行や物を粗末にしないこと等。つまり、「ご先祖様を大切にして、人としての生き方」を教わった。

●母親から受けた教え

昔、豪商であった家の娘が戦火を避けて疎開してきた事もあって、村人の目は厳しかった。

Adaが小学校に通い始めると、いわゆる”いじめ”が毎日のようにあった。

なけなしの芋を3個ふかした弁当を学校の横を流れている川の中に投げ込まれたり、集団による暴力、捕ったドジョウを食べる事への中傷等々、日常茶飯事であった。

家に帰っていじめられたことを母親に言うと、「お前は、豪商源三郎の孫だ」し、「父親は日本一の大学を卒業しているのだ」。そんじょ、そこいらの子供達とは、まったく違うのだ。胸を張っていなさい。　といつも云われた。

この母親の教えのお陰で卑屈にならなかったし、4、5人を相手に喧嘩をしても勝ち、いつも、大手を振って歩いていた様に思う。

要するに、親の教育ひとつで、子供は卑屈にならず、逆境に強く、忍耐強い、プライドを持った（勝ち気）子供にもなると云う事だ。

●父親から受けた教え

父親についての記憶はほとんどないが、一つだけ、強烈に記憶に残っていることがある（幼稚園児の頃だと思う）。

ある雨上がりの日に、竜田方面に釣りに出かけたが、一匹も釣れない。あちこち歩き回って釣っているうちに、Adaは足を滑らせて川の中に落ちた。水に沈みながら辺りを見渡したが、魚は一匹もいなかった。「これじゃ、つれるわけないな」と思っている間に、足が底について一度浮かび上がり、また沈んだ。

その時、父親が対岸から水に飛び込んで助けてくれた。確か、父親の胸の辺りの深さだったと覚えている。父親は、非常に不機嫌な顔をしていたことも覚えている。

この時の記憶は成人になっても残っており、父親と釣りに行くときは、父親が何時、水に落ちても助けられるように、何時も注意をしていた。

幸いにして、その様な事は一度も起きなかった。

父親とは札幌に住まいを移してからの記憶は沢山ある。

＊大八車を引いて月寒の農家へカボチャを買いに行き、山盛りで帰ってきたこと。
＊コッペパンを買って、厚別まで歩いて釣りに行ったこと。
＊宿題を汽車の中で教わって、釣りに行ったこと。
＊英語やドイツ語を良く教えてもらった事。辞書がいらないくらいだった。
＊コクワ、山ブドウ、キノコ、蕗の薹を藻岩山に採りに行ったこと。
　また、父親からは、むかし自分が体験した事をよく聞かせられた。
＊子供の頃、米2合を持って熊よけの草笛を吹きながら定山渓まで釣りに行った事。
＊ツエルマットに朝日があたり、綺麗なモルゲンロートをホテルの窓から見た事。
＊ミュンヘンの大衆酒場の側に、ヒトラーが決起した家がある事。
＊エジプトのスフィンクスやピラミッドに登ったこと事等々
Adaは、成人してから、不思議なことに、父から聞いたルートと場所をすべて訪ねていた。

親が経験した事を、子供に聞かせる事が、如何に大切なことかを改めて感じた。

さらに、

＊大学創設（北海学園大学と産業短期大学）時の父親の苦難を肌身で味わった事。

＊金は戦争でとられるが、頭の中に蓄えた知識や知恵は取られない。金より大切なものがあることを教えられた。

＊親の七光りを受けることが出来ない者は、かわいそうだ。つまり、子供が努力してある所までに到達していなければ、親は、如何ともしがたいと云う事。

＊生き残るには、「運、根、鈍」だと教わった。今の時代は、「スピード」がプラスされるかもしれない。

「はな」ばあさんからは、「ご先祖様を大切にして、人としての生き方」を学び、母親からは、「プライドと、逆境に強い忍耐力」を、父親からは、「知識と生き様と世界観」を与えられた事が、Adaの人生に大きく影響していった。

さいごになったが、Adaの家族を紹介しておこう。

川並と安土の二つの家で、両親と6人の兄弟（長男、次男、三男、四男、五男、次女）の計8人が生活をしていた。Adaは、7人兄弟の6番目、5男。

長男は病気で川並の家にいたが、時々、長兄が寝ている枕元に座って、怪談「耳なし法師」や「牡丹灯籠」の話を聞かせられ、震え上がった事は覚えている。

また、空気銃をもった長兄が、たった1発しかない弾で、蔵の上に止まっていたハトを射止めた時の息が詰まりそうな緊張感。ハトは射止めたが、何処かへの土産となってしまったくらいしか覚えていない

妹については、Adaが魚を捕ってきた時、急いで水を持ってくることを頼んだ時の事だ。

ガラスコップに水を入れて持ってきた妹が転んで手に大けがを負ってしまった。急いで近くの病院に連れて行って、手からガラス破片を取り出してもらった。そばで見ていたAdaは血を見て具合が悪くなってしまった事は覚えている。

他の兄弟についてはほとんど記憶に残っていない。
歳が離れていた事もあって、一緒に遊んだことと云えば、川並の前の川をせき止めて魚を捕った事位だ。

6．兄弟が見たふるさと

これから紹介する体験は、三男の記憶によるもので、Adaが知らない多くの事柄を知ることが出来るのでご紹介したい。

住んでいたところは、川並と安土があった。
安土に住まいを構えたのは、母が次兄のために生きていく手段として土地を手に入れるために琵琶湖の干拓に入った事。
住む家は、母親が持っていた着物を売り払って家を建てたとの事。両親は次男の農業を手伝っていた。

お袋さんは切通し近くの山中に軍事地下壕を掘るための勤労奉仕に駆り出されていたのだ。

安土駅から中学校のある切通しの道で、私が中学一年生、母と二人で安土から川並に帰る時、20kg程の米袋を自転車の荷台に載せて、その上にお袋を乗せて走った。安定性が悪いので、途中で何度もお袋が転げ落ちた。あやまると、「お前に無理をさせたのは私の方だよ」と言っていたのを思い出す。

また、お袋は安土の裏山を越えた所。琵琶湖の干拓が未完成の時代に、勤労奉仕で、胸まで泥に浸かって、田植えしたのだ。

作業中に、グラマンの機銃掃射を受けたとさ。手拭いを泥で染めて、身を伏せたと聞いている。

大きなダブ貝を懐に入れて、石川の家に持ち帰り、札幌のおばあさん（父親の母）に食べさせた。おばあさんは、「刺身が食いてー」と言ったが、寄生虫だらけだと判っていたので、煮て食べさせた。

その後、間もなく亡くなったのだ（1945年8月3日）。後で、お袋が「あの時、こんなに早く亡くなると分かっていたら、お刺身を食べさせてあげたらよかったのに」と悔やんでいたな。

●**私たちの青春時代は暗かったなぁ**。それでも、丈夫に生き永らえることができたのは、親父のバイタリティがあったからだ。

真冬に、スコップ持って、田圃の畔の、涸れた水路を掘り起こして、ドジョウをたくさん食べさせてくれたし、安土の干拓地でも蛋白源を始終食べさせてくれた。

川並のおじいさんは亡くなっていたのだが、近江商人なる、大金持ちは私たちに冷たかったなぁ。

戦後、自転車に乗った魚の行商がやって来るが、一度も魚を買って食べさせてはもらえなかった。

その時の魚は「ブリの切り身」だったのだ。
だから未だに「ブリ」は大嫌いだわ。悔しくてなぁ。

●現在の安土町石山付近の峠越えの道：
途中に土葬墓場があって、５０センチにも伸びた土筆が生えていた。
四男と二人で土筆を採ったあと、土中から死人の足が飛び出していて腰を抜かしたよ。

●石馬寺（聖徳太子を祭っている）がある。そこに石棺があったのかな？
お友叔母（母親の妹）さんが売った三山、円山と呼んでいた。
古代の巨石墓跡があって、石棺を覆っていた巨石しか残っていなかった玄室は既に空っぽで、石棺があったのか、無かったのか、郷土資料館に行かないと本当のことは解らない。

親父と一緒に、円山を開墾して、作物を栽培し始めたのだが、野うさぎのテリトリ

ーでは全滅だったよ。

そんな農作業の真っ最中に、南五箇荘小学校がグラマンに空爆されたのだ。昭和20年6月頃だったかなあ。　学童は各鎮守の杜で分散授業していたから児童の犠牲者は居なかった。

4男の担任の辻先生が管理していた理科教室の床下のロケット弾一発は不発。渡り廊下の床下で一発がさく裂。

攻撃を受けた原因は、私ども六年生が川上村まで大八車を押して行き、こわ板なる製材の端材を持ち帰って、木製飛行機を作り、アルミ板を張って、運動場で組み立てたのだ。それを米軍が見つけて、軍需工場だと勘違いしたのだ。

八日市航空隊用のダミーなのにさ。

マツタケ時期に円山で松ぼっくりを拾っていたら、馬車道のブイチ（武一）さんと

いう親父に見つかって、交番まで引き立てられたことがあったわ。　私にしたら、お爺さんの山に入って何で怒られるのやら意味が判らなかったのだ。

この記憶は、Adaにもある。いつも遊んでいる円山の遺跡の上に乗って遊んでいたら怒られた。どうして怒られるのかわからなかったが、後年わかったことは、松茸の時期は山全体を松茸狩りとして業者に売っていたのだ。

ただし、その円山と言う小山全体や、そこに至る参道のような土手道路は、すべて東海道新幹線建設時に、建材として使われてしまったのだと聞いている。

●**ちなみに、札幌のお婆ちゃんの葬列**が、その参道を通っている最中に空襲警報が鳴って白装束を脱いで、土手下に逃げ隠れしたのも思い出したわ。　昭和20年8月上旬だよ。

円山のあった跡近くに、お友叔母さんが入居していた老人ホーム「きぬがさ荘」が建っていたのだわ。

●大阪時代

1）Adaの記憶

Adaの記憶に残る事は、空襲警報と同時に家の床下の防空壕にもぐりこむ。そこには、「おかゆ」と言う足の長い虫がいて、飛び跳ねるのが怖かった。

家の近くの石山で、糸の両端に小石むすんで、”ラッポーエー”と云うかけ声と共に、空に投げると、オニヤンマやギンヤンマがガチャガチャと音をたてて糸に引っかかって落ちてきた。

天王寺公園の池には、日の丸を背負った亀が沢山いた。

戦災で親を亡くした子供たちの施設にAdaと妹が一時期預けられて、寂しい思いをした事があった。それ以来、施設アレルギーとなってしまった。

Adaの断片的な記憶とは違って、兄（三男）の記憶はより広範囲に及んでいるので、続けて紹介したい。

2）三男の記憶

私たちが大阪市阿倍野区昭和町中二丁目十七番地に住んでた、昭和１０年代、おそらく昭和17、18年ごろの話。

ちょっと出かけるときは、バス停留所まで徒歩10分、郵便局の隣にある文の里電車駅までは徒歩20分、住吉公園や浜寺海水浴場に行くには徒歩30分くらいだったかな。

この住吉公園と天王寺の間を走る路面電車を阪堺電車という。その住吉駅から住吉公園駅までの支線が廃止された阪堺電車の思い出はいっぱいあったので、一つお話しましょう。

真夏、天下茶屋駅から浜寺へ家族みんなで海水浴に出かけた父母、長兄、姉、三男（私）、四男、五男、妹だった。
次男はまだ滋賀県の祖父宅に預けられていたので居なかった。

帰りの電車は超満員、天下茶屋駅に着いて、さあみんな降りて！の号令。　どかどかっと降りたところがね、母が私の履物を持って降りてしまったのだ。

足元の履物を探している間に、電車は出発してしまった！？　やむなく、私は隣の松虫駅で降りた、裸足でね。
天下茶屋駅に戻ろうとしてもキップが無い。見かねた大人がキップを一枚くれた天下茶屋駅からは裸足のまま30分歩いて帰った。

家に着いて、思わぬことを聞かされた　長兄が天王寺駅まで追いかけて行ってるよ！
要するに、小さい子供に気を取られて、中途半端な私にまで目をかけておれないの

だ

それでも、一人足りないことはすぐに判るのだ　電車の乗り降りの際には必ず全員の名前を呼んで点呼していたからね

阪堺電車と聞いて、70年余も昔のことを思い出させてくれた。

あとがき

ふるさと探訪が終わった現在、気になっていた事をやり終えて、ホッとしたと同時に、母親は田んぼの仕事が終わってから、妹を背負い、Adaの手を引いて延々とよく歩いたと思う。

母親の肉体的、精神的強さを身をもって知った「ふるさと探訪」となった。

さらに、両親は7人の子供たちを一人も欠かすことなく元気に育ててくれたおかげで、7人の子供たちは、すべて立派に成人して社会に役だった。

ここに改めて感謝したい。

●Adaには、二つのふるさとがある。

ひとつは、川並・安土で、他の一つは札幌だ。

はじめのふるさとは、いじめや孤独、飢餓状態の中で「はな」ばあさんや母親から、「ご先祖さまを大切にする事」、「善悪や道徳心」、「逆境に屈しない忍耐力」、「プライドを持つ事」等など精神的な教えを受けながら健康に育つことが出来た。

札幌に移転した後は、父親から「知識」と「生き様（なにくそ精神）」と「世界観」を与えられたし、同級生や近所の仲間からは友達として優しく迎えられた。

この二つのふるさとでの出来事が、Adaの人生の根幹を形成して今日がある。

Adaにとって、川並・安土とも大切なふるさとだが住みたいとは思わない。

一方、札幌は、大都市になりすぎて昔の良さはなくなってしまった。

ふるさとを訪れるたびに懐かしく、いつも行きたくなるふるさとだが、室生犀星の

「ふるさとは、遠きにありて思うもの云々」という詩句が思い出されるのは、致し方ないことかもしれない。

父親は、百歳で天寿を全うした。その折に、作った詩。

一、数千里照らす光は七色の
道はここぞと、ただ一筋
遥かにそびえる灯台一つ

二、風や嵐や吹雪にたえて
闇夜に迷う諸々の
道はここぞと導きて
大海原にそびえる灯台一つ

三、光り輝く七色の
導き終えて、力つき
百とせそびえし灯台の
光も消えて、いま、やすらか

一九九〇、一〇、一八　ANA 千歳、羽田間　5男

参考図書

1．塚本源三郎「近江商人 豪商塚本家 女子教育者・塚本さとの次男
https://www.biwako-visitors.jp/spot/detail/20558/
（注）ハイフォンに注意のこと

2．阿部利雄、「苦難坂私学道」、
http://miro.la.coocan.jp/kunanzaka/kunanzaka.html

使用機器（GPS測定）

1．GARMIN fenix 6X Sapphire Black

■家族構成

父ーー北海道教育大学教授、北海道学園大学・産業短期大学創設　教授、学長・理事長（没）

母ーー専業主婦　（塚本源三郎の次女）（没）

長兄ー順天堂医大病気中退　（没）

次男ー農林省勤務しながら安土で農業（没）

長女ー東京女子大学名誉教授、旭川大学教授

三男ー帝人中央研究所、独立して会社（阿部技研）設立　取締役

四男ー農林省林業試験所、新潟大学教授、日本猛禽類研究機構　理事長

五男ー道立総合経済研究所、道立寒地建築研究所、常磐大学名誉教授

次女ー専業主婦